

「肥のあかり」の高品質果実安定生産のための適正葉果比

「肥のあかり」の適正着果量は、葉果比で25枚程度である。収穫果のMS級果率が高く、果実品質も良好である。また、浮皮の発生も比較的少なく、次年度の着果量も確保でき安定生産が可能である。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 北園邦弥)

研究のねらい

県育成の新品種である「肥のあかり」は、成熟が早く、県産温州ミカンのトップバッターとして有利販売されることが期待されている。しかしながら、栽培性については不明な点が多いため、高品質果実を安定生産するための栽培技術を早急に確立する必要がある。

ここでは、高品質果実を連年生産するために着果量と果実品質、収量の関係を解明する。

研究の成果

1. 果実品質は、葉果比15枚区 (以下15枚区) で糖酸ともに最も高い。葉果比25枚区 (以下25枚区) の糖度 (Brix) は、15枚区について高い。クエン酸は、最も低い葉果比35枚区 (以下35枚区) について低い (表1)。
2. 着色は、15枚区が最も良く、25枚区がこれにつづき、35枚区が最も悪い。浮皮発生は、15枚区で最も少なく、35枚区で最も多い (表2)。また、着果量にかかわらずL級以上の果実の浮皮発生はかなり多い (データ略)。
3. 収量および階級比率は、25枚区がMS級果率が高く、収量も多い。15枚区は、25枚区について収量が多いが、S級果以下の割合が極めて高い。35枚区は、浮皮発生の多いL級果以上の割合が高く、当年の収量も少ない (図1、表4)。
4. 次年度の着花 (果) は、35枚区が最も多く、葉花 (果) 比は低い。25枚区は、35枚区に比べやや少なく、15枚区は最も少ない (表3)。
5. 25枚区の2年間の累積収量は35枚区について多く、15枚区は最も少ない (表4)。
以上のことから、25枚区はMS級果率が最も高く、糖度は11度以上でクエン酸も低い。また、浮皮の発生も比較的少なく、次年度の着果量も十分に2年間の累積収量も多い。

普及上の留意点

1. 本試験結果は、シートマルチ栽培における結果初期のものである。
2. 本試験における摘果は、7月上旬に粗摘果、8月上旬に仕上げ摘果を実施したが、摘果の時期、程度によっても、適正葉果比は変動する。

表1 「肥のあかり」の着果量の違いが果実品質に及ぼす影響(2004年)

処理区	1果	Brix	クエン酸	甘味比
	平均重			
	g		g/100ml	
15枚区	74.1	12.6	0.78	17.8
25枚区	93.2	11.7	0.70	18.7
35枚区	104.6	10.3	0.59	19.2

注1) 2004年9月28日収穫、29日分析

2) 葉果比の設定日：7月4日(1割増)、8月3日(最終)

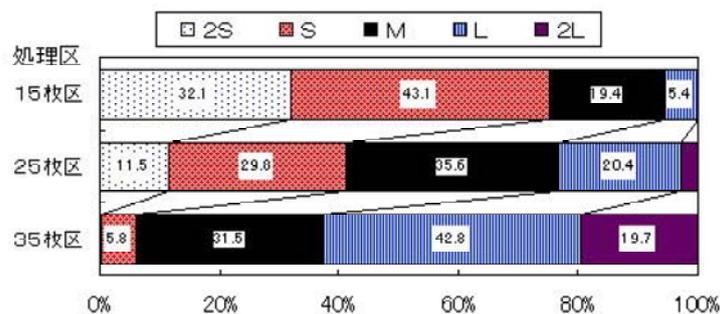


図1 「肥のあかり」の着果量の違いが果実の階級比率に及ぼす影響(2004年)

表2 「肥のあかり」の着果量の違いが着色、浮皮に及ぼす影響(2004年9月30日調査)

処理区	調査果数	着色程度別割合(%)				着色平均	浮皮発生率	浮皮発生指数
		2分以下	3~5	6~8	9分以上			
15枚区	168果	3.2	36.5	53.4	6.9	6.0	3.8%	1.5
25枚区	139	28.5	43.6	26.1	1.7	3.8	11.5	5.7
35枚区	90	49.1	49.1	1.9	0.0	2.5	29.7	16.5

注) 浮皮発生指数 = $\frac{\text{軽} \times 1 + \text{中} \times 2 + \text{甚} \times 3}{\text{調査果数} \times 3} \times 100$

表3 「肥のあかり」の着果量の違いが次年度の着花(果)に及ぼす影響

処理区	新葉率	有葉花率	葉花比	葉果比	着果率
15枚区	68.3%	50.1%	9.6	60.8	15.7%
25枚区	58.6	36.0	5.6	20.5	27.5
35枚区	55.4	37.6	3.7	17.0	21.7

注) 2005年調査

表4 「肥のあかり」の着果量の違いが収量に及ぼす影響

処理区	1樹あたり収量			平均果重(2004)
	2004	2005	合計	
15枚区	12.2kg	20.7kg	32.9kg	72.2g
25枚区	13.5	22.3	35.8	94.1
35枚区	10.6	27.1	37.7	118.4

注) 2004年に葉果比設定